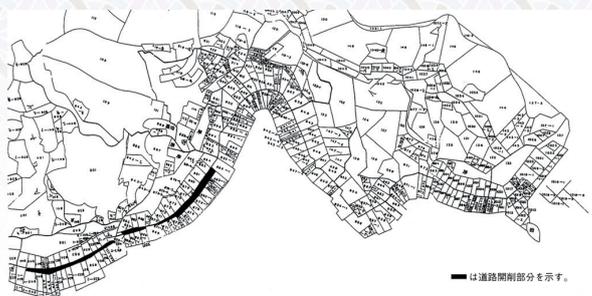


「舟屋群」

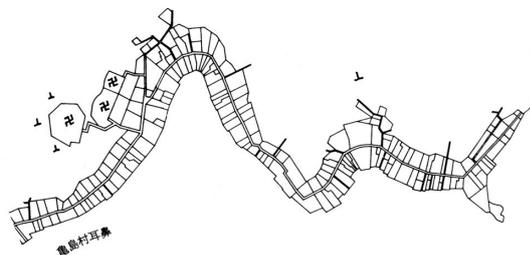
京都府伊根町

伊根浦にいつごろから人が住み着いて集落を築いたのか、その起源は定かではない。日出、高梨、平田村の存在を示す最も古いものとして、日吉神社(宮津市岩ヶ鼻)に所蔵されている棟札がある。棟札は7枚あり、天文18年(1549)のもの3枚、天正6年(1587)のもの3枚、元和8年(1622)のもの1枚である。これらの棟札には、社殿増修嘗当時の代官、奉行人、大工の名と共に、伊禰(伊根)庄の有力者の名前が記されている。天文18年の棟札には、日出、高梨、平田村という文字が見えることから、3村は少なくとも天文18年以前に成立していたことが分かる。立石、耳鼻、亀山が記録の上で確かめられるのは、亀島地区による明暦2年(1656)からの捕鯨記録「鯨永代帳」(昭和2年まで)である。伊根浦における捕鯨は天文年間に始められたと伝えられており、当初は亀島、平田両村にその権利があったが、明暦2年以降亀島村が独占するようになった。捕鯨の方法は、湾内に入った鯨が逃げ出さないように、青島を中心として高梨、亀山方面に網を張って湾口をふさぎ、耳鼻の谷や黒地、大浦の入江に追い込むという壮大なものであった。村総出で鯨を捕り、捕獲後4地区で入札が行われていた。



耳鼻地区の江戸末期の地籍図に見る宅地形成状況

江戸時代末期のものと思われる地籍図によると、明らかに一部を除いて短冊型地割の舟小屋部分と主屋部分の境界に道路敷が区画されておらず、船による往来が一般的であったと見られる。しかも、この江戸時代末期のものと思われる地籍図には、その端部分に明らかに道路のためと思われる区画線が平田側から現れており、まさに近代化のための“道普請”の現在進行形を伺うことができる。



耳鼻地区の明治初期の地籍図に見る宅地形成状況

一方、明治初期の地籍図を見ると、全ての短冊型地割に道路敷が現れている。舟小屋の敷地数が主屋部分の敷地数を上回っており、明治以降の各漁家の経済の消長によって、主屋敷が売買されて間口が広がった経緯が見られる。